

連載
子どもに聞かせたい、
こんな話 その18

こころざし高く

親を亡くした子供たちのために一生をささげた女性——瓜生 岩

岩は1829年(文政12年)、今の福島県喜多方に生まれました。14歳の時、母のすすめで会津藩の医者であるおじさんの家に行儀見習いに出ました。ここでの生活や学んだことが後の岩の社会活動のもとになったと言われています。やがて結婚し、若松で呉服屋を始めました。子供も生まれ、店も繁昌しましたが、夫が重い病気にかかり7年後に亡くなりました。岩は店を人にゆずり、再び喜多方に移りました。

なつて愛情を込めて育てました。この子供たちは岩に感謝するともに、自分のことは自分でできるよいうにすることや、将来世の中の役に立つ人となるため、一生懸命勉強にはげました。

明治5年に小学校ができ、岩の開いた学校は閉じることになりましたが、岩はその後福島県で、そして東京に出ても貧しい人々を助けたら、親のいない子の面倒を見たりすることに全力をつくしました。

これらの活動により、女性として初の藍綬褒章(公共の利益に尽くした人に国が与える藍色の徽章)を授与されました。しかし、1897年(明治30年)福島に帰った岩は、無理がたたり心臓病で多くの人におしまれながら亡くなりました。

浅草寺の本堂に向かって左手の庭に、銅像となった岩の優しい顔を、今も見ることができます。



(宮坂有洪監修「修身」全資料集成より
小学校4〜6年生用副読本に掲載)
お問合せ先：教育支援館

☎5246-15921

平成27年度 国際理解重点教育 ～中学生デンマーク派遣～

台東区では、豊かな人間性を培い、国際社会において信頼の得られる区民の育成を目指して、区立中学生の代表を姉妹都市であるデンマーク・グラスサックセ市へ派遣する事業を行っています。

今年度は、8月19日(水)～25日(火)に実施し、生徒たちは貴重な体験をしてきました。海外派遣並びに9月26日(土)の報告会の様子をご紹介します。

すばらしい体験、貴重な経験ができました！～生徒の声より～



今年度はグラスサックセ市スコウブリュネトスクールでの学校訪問となりました。先生方や生徒のみなさんに歓迎され、一緒に授業をうけました。



グラスサックセ市表敬訪問では市議会の会議場で歓迎のセレモニーを行っていただきました。市の方々と交流する貴重な機会となりました。



最終日のフェアウェルパーティーは最高のものになりました。一緒に踊り、別れを惜しみ…。ホストファミリーに感謝の気持ちを伝えました。



9月26日のデンマーク派遣報告会では、自分たちが調べてきたテーマや派遣期間中の出来事を発表しました。



お問合せ先：指導課 ☎5246-1453

リレートーク

連載 19

大人は凄い、親って凄い、と感じさせたい



上原 一夫
中学校長会 会長
(上野中学校 校長)

現在、中学2年生では、全校で3～5日間程度の職場体験を実施しています。この事業は本区に限らず全都の中学校で実施しているもので、全国的なフリーター・ニートの増加に伴い、東京都が平成17年度より「わく (Work) わく (Work) Week Tokyo」事業をスタートさせたことによりです。

もちろん、それ以前にも各中学校では職場体験を行っていましたが、1～2日間程度であったために体験というよりは見学といった取組が大半でした。では、3～5日間程度になるとどうなるかというと、職場の方も生徒をいつまでもお客さん扱いをしている暇はないため日常の様子を見せざるを得なくなり、生徒の方も1日なら猫を被っていられますが、長くなるとそうはいかなくなります。

ではこの職場体験をすれば望ましい職業観や勤労意欲を

高めることができるかというと、残念ながらそれもNOです。3～5日間程度では到底育ちません。しかし終わったあと、生徒から「工場長さんの、君たちはテストで80点や90点を目指すかもしれないが、大人は製品をつくるときに常に100点満点を目指しているんだ、という話を聞いて、大人って凄いと思った。」という感想があったり、「親の仕事を体験しにいったら、身体がへとへとになった。それにもかかわらず、毎日家族のために働いてくれている親って凄い。」という感想があったりします。私は、こういう感想が聞けるだけでも意義があると思っています。なぜなら、日常生活の中では、こんな言葉など聞けないものです。大人って凄い、親って凄い。私は、こんな言葉を引き出すことができる職場体験事業を、これからも推進していきたいと考えています。

